

平成 22 年 4 月 6 日現在

研究種目：若手研究 (B)
研究期間：2007～2010
課題番号：19730369
研究課題名 (和文) 認知症介護家族への支援におけるナラティブ・アプローチに関する研究
研究課題名 (英文) Studies on Narrative Approach in the Support for Family Caregivers of Dementia
研究代表者
荒井 浩道 (ARAI HIROMICHI)
駒澤大学・文学部・准教授
研究者番号：60350435

研究分野：社会福祉学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：ソーシャルワーク、ナラティブ・アプローチ、家族支援、ピアサポート、認知症
家族会、質的研究、テキストマイニング

1. 研究計画の概要

本研究は、認知症高齢者をかかえた家族を支援する技法としてナラティブ・アプローチに着目し、その有効性を理論的、実証的に検証するとともに、ソーシャルワーク理論としての体系化を図るものである。

2. 研究の進捗状況

(1) 文献レビュー

認知症ケア、家族会、ソーシャルワーク、ナラティブ・アプローチ、回復の語り、エンパワメント、ケアマネジメント、社会構成主義、ストレングス、セルフヘルプ・グループ、質的調査法、テキストマイニングなどに関する国内外の文献レビューを行った。

(2) ソーシャルワークの実践的研究

地域包括支援センター社会福祉士(非常勤)としてナラティブ・アプローチを用いたソーシャルワーク実践を行い、その実践からデータを収集して分析を行った。

ソーシャルワークにおける「理論と実践の乖離」克服の方向性をポストモダンの対人援助技法としてナラティブ・アプローチに求め、その専門性、固有性を理論的に整理した。そして、わが国のソーシャルワーク実践において、認知症介護家族への支援におけるナラティブ・アプローチの一定の有効性が検証された。

(3) 認知症介護家族への参与観察

首都圏の認知症家族会を対象に参与観察(一部業務委託)を行い、逐語録を作成した。司会者、世話人がその場で展開される言語的な営みをファシリテートする方法に着目しながら分析を行った。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進呈している。

(理由)

本研究における当初の研究目的では、認知症高齢者をかかえた家族へのナラティブ・ア

アプローチを用いた支援のうち、個別援助として地域包括支援センター社会福祉士（非常勤）の実践からのデータ収集、また集団援助として、認知症家族会への参与観察による逐語録の作成を予定していた。本研究は現在までに、この当初の計画がおおむね順調に進展している。

4. 今後の研究の推進方策

本研究の今後の研究推進方針として、認知症家族会の逐語録の分析を進め、論文投稿を行う。またナラティブ・アプローチを用いた個別援助、集団援助、地域援助の統合を図り、ソーシャルワーク理論として体系化する。

今後のさらなる展開としては、テキストマイニングによる質的研究の可能性を検討する。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ①荒井浩道（2010）「ナラティブ・ソーシャルワークにおける『回復』のポリティクス—認知症介護家族への支援を中心に」『駒澤社会学研究』42, 13-30, 査読なし.

〔学会発表〕（計5件）

- ①荒井浩道（2009）「ナラティブ・アプローチにおける『書き換え』の技法—『ナラティブ・ソーシャルワーク』の可能性」（第57回日本社会福祉学会大会、法政大学、2009年10月11日）
- ②荒井浩道（2008）「拒否的／消極的利用者への支援—ソーシャルワークにおけるナラティブ・アプローチによる介入」（第20回日本生命倫理学会大会、九州大学、2008

年11月30日）

- ③荒井浩道（2007）「ナラティブ・アプローチのソーシャルワークにおける／としての固有性」（第55回日本社会福祉学会大会、大阪市立大学、2007年9月22日）
- ④荒井浩道（2007）「ソーシャルワークの専門性とナラティブ・アプローチ」（第24回日本社会福祉実践理論学会大会、大妻女子大学、2007年6月）
- ⑤荒井浩道（2007）「地域包括支援センターにおけるナラティブ・アプローチを用いたソーシャルワークの実践」（第15回日本社会福祉士学会大会、阿児アリーナ、2007年6月）

〔図書〕（計1件）

- ①荒井浩道（2008）「繋がっていかない利用者への支援—ソーシャルワークにおけるナラティブ・アプローチの可能性」崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井さよ編『〈支援〉の社会学—現場に向き合う思考』青弓社, 114-137.